

令和5年度
推薦入学試験

国語総合

広島県立三次看護専門学校
第一看護学科

受験番号() 氏名()

答案作成上の注意

- 1 受験番号，氏名は，解答用紙の所定の欄に必ず記入すること。
- 2 解答は解答用紙の所定の場所に記入すること。
- 3 配布した問題用紙，解答用紙は持ち出してはならない。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

気の毒な話ですが、今の子どもたちは、生まれてから育っていくカテイ^aでどンドン^b身体感受性が鈍感^①になるようなカンキョウ^bに置かれています。

都会で生活する人は、視覚的にも聴覚的にも刺激が大きすぎますから、知覚の回路をオフにせざるをえません。当然ですよ。都会の街路にあふれる大量の音楽やら、おしつけがましい広告やら、路面や車内での絶え間ないアナウンスやらにいちいち反応していたら身が持ちません。

どうしても、知覚の入力に際しては、選択的に聞こえないようにしたり、見なかったりして、自分を守ることが必要になります。その防衛システムとして、都会生活者は自ら進んで知覚をオフにしているのです。

人の耳は聞きたくない周波数だけ消すことができますし、見たくないものに目を閉じることもできますし、嗅ぎたくない臭気を排除することもできます。ですから都市生活者はだいたいザットウ^cにあるときは、視線を狭い視界に固定し、サングラスをかけて視界を暗くし、耳はヘッドフォンでフサぎ^d、肩をすくめてムネ^eを締めつけて、外気にフれる^fヒフ^gの表面積を最小化し、悪臭を嗅がされないように嗅覚を殺し、息も決して深く吸わないようにツトめて^hいます。ずいぶん七面倒な知覚遮断だと思いますが、それも当然です。見たくないもの、聞きたくないものが街にはあふれ返っているんですから。都会で暮らしている以上、感覚情報を選択的に遮断するのは、自己防衛上は避けられないことなのです。

A、身体バランスを乱す知覚的なノイズから身を守るために感受性の回路を遮断するときは、ときには自己防衛上ほんとうに必要な知覚情報までとりこぼすことになりかねません。

自分のまわりに防衛のためのバリアを張るということは、外側に起こっていることに対して鈍感になるということと同義です。

近年の子どもたちは小さい頃から、家にこもって、漫画やビデオゲームなどの視覚中心の遊びに耽^ふ傾向があります。ゲームでは動体視力と反射神経は向上するでしょうが、それ以外の知覚、全体的な身体感覚や背中の感覚などは育ちようがありません。

人間としてバランスのよい身体感受性を育てるためには、いろいろな方法があります。子どもの遊びはその一つです。例えば、「ハンカチ落とし」という遊びがあります。内側を向いて円陣を組み、「鬼」がその後ろを周回し、誰かの後ろにハンカチを落とします。それに気づかず一周して肩を叩かれたらその人が次の「鬼」というゲームです。

この遊びはどんな知覚を開発するためのゲームなのでしょう。

ハンカチは背後に落とされますから、もちろん目にはみえないし、音もしません。ハンカチが空中を落下するときの空気のシンドウⁱは「鬼」のサワ^jがしい足音に比べればほとんど知覚不能でしょう。それでも勘のよい子は、ハンカチが地面に落ちる前に、自分の後ろに「鬼」がハンカチを落としたことを察

知します。いったいこの子は何を感知したのでしょう。

それは「鬼」の心に浮かんだ「邪念」です。

「この子の後ろにハンカチを落としてやろう」という、「鬼」の心に一瞬兆した「悪意」を感知するのです。

別にオカルト的な話をしているわけではありません。人間は誰でも緊張すると心拍数が上がり、発汗し、呼吸が浅くなり、体臭が変化します。恐怖や不安だけでなく、羨望や敵意も、そのような微弱な身体信号を発信します。（嘘発見器はその原理を応用したものです）。

勘のよい子どもは、自分の後ろでハンカチを落とした瞬間の「鬼」の緊張がもたらすこの微弱な身体信号を敏感に感知することができます。ぼくはそれを「邪念を感知した」というふうに言っただけです。

しかし、これはたいへん優れた身体能力開発ゲームだとぼくは思います。というのも、原始の時代においては、ぼくたちの祖先は暗い森の中で、肉食獣や敵対的な異属と隣合わせて暮らしていたはずだからです。そのときに、自分を攻撃してくるものが発するわずかな身体信号を感知できる個体とできない個体では、どちらが生存確率が高かったか、考えるまでもありません。

感覚を統御し、練磨するためのエクササイズを「遊び」というかたちで子どもたちに繰り返させていたのではないのでしょうか。

「かくれんぼ」というのは、おそらく起源的には狩猟のための感覚訓練であったとぼくは思います。見えないところに、見つからないように隠れているものが発信する微弱な恐怖と期待の身体信号、それを感知するための訓練だったのではないのでしょうか。

「鬼ごっこ」にせよ「缶蹴り」にせよ、その種の遊びで子どもにも要求されるのは、単に足が速いとか、高いところに上れるというような単純な身体運用能力ではなく、それよりむしろ、「気配を察知する」総合的な身体感受性であったらろうと思います。

しかし、そういう種類の身体信号を受信する能力を開発する身体感受性の訓練技法は、今の社会では組織的に失われてしまいました。

学校で行われる体育は、一〇〇メートル何秒で走るとか、何メートル跳べるかといったデジタルに数値化できる身体能力だけに焦点を合わせています。確かに、そういう能力もライオンに追われるような場合に「動物としての人間」が生存するためのたいせつな能力ではありますが、それと同じくらいに、あるいはそれ以上にたいせつな身体能力は「ライオンがいそうな気配を事前に感じる」能力でしょう。

遊び以外の身体技法でも、もちろんそういう能力を重視するものがあります。トップ・アスリートは、単に反射神経がいいとか、筋力や骨格の性能がよいだけではなく、「スキャンする」能力が高い。

中村俊輔や中田英寿は、ほとんど「背中に目がある」ような身体感覚を持っていますし、イチローは、相手のピッチャーの微妙な体の使い方から、ボールがどこでリリースされるか、どういう回転をして、どのゾーンに来るかを瞬間的に判断して、そこに向かってバットコントロールをしていますし、守備

のときは、バッターがボールを打つとほとんど同時にボールの落下点を予測してそこにダッシュしてゆきます。

すぐれたアスリートは「起きた出来事」に反応しているのではなく、「起きる気配」にすでに反応して、コンマ何秒の間にそういう微調整ができるように身体を訓練しているのです。ここに発揮されているのは、ほとんど「未来予測」といってよいような総合的で繊細な身体能力です。

このような「先を読む感覚」というのは、そのためだけの訓練が必要です。走り込みやウエイト・トレーニングをいくらやってもこういう感覚は少しも磨かれません。きつい、苦しい負荷に耐えるという訓練は逆に身体感覚を鈍感にするだけです。

(内田樹『疲れすぎて眠れぬ夜に』より)

注 中村俊輔……元サッカー選手

中田英寿……元サッカー選手

イチロー……元プロ野球選手

問一 傍線部 a～j のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 A、B に当てはまる語を、それぞれ次の①～⑥の中から選び、番号で答えなさい。

- ① あるいは ② しかし ③ しかも ④ たとえば ⑤ ですから ⑥ なぜなら

問三 傍線部①「鈍感」の対義語を本文中から探し、答えなさい。

問四 傍線部②「知覚の回路をオフ」にする、ということについて具体的に説明している二百十字程度の記述を探し、その最初と最後の五字を抜き出して答えなさい(句読点なども一字と数える)。

問五 傍線部③「自己防衛上ほんとうに必要な知覚情報」とは具体的にどのような情報か。これを明確に言い表した二十三字の言葉を探し、その最初と最

後の五字を抜き出して答えなさい（句読点なども一字と数える）。

問六 傍線部④「ハンカチ落とし」について、筆者はこの遊びが受け継がれてきた理由をどのように考えているか。百五十字程度で整理しなさい。

問七 「ハンカチ落とし」「かくれんぼ」「鬼ごっこ」「缶蹴り」などのかつての遊びと、漫画やテレビゲームなどの現代の遊びについて、それぞれのよう
な能力や感覚が養われると筆者は考えているか、端的に答えなさい。

問八 本文全体について、次の（ア）（イ）の問いに答えなさい。

（ア）内容のまとまりから大きく二つに分けるとすると、後半はどこから始まるか。後半部分の冒頭五文字を答えなさい。

（イ）前半と後半の文章の展開についてどのような特徴があげられるか五十字程度で述べなさい。

問九 筆者が述べる「身体感受性」「身体感覚」は、あなたが目指す看護の現場において、あるいは看護師として、どのように生かすことができると考えられるか。あなた自身の看護や介助、介護、入院等の経験や知識に基づいた具体を示し二百字程度で述べなさい。